富山県現代俳句協会会報

Toyama Prefecture Modern Haiku Association Newsletter

第63号

令和6年12月31日発行

令和六年度 富山県現代俳句協会 秋季吟行俳句大会

九月二十九日(日)やや曇り空であったが、涼風の心地よき日、今年度の秋季吟行俳句大会を高岡市に於いて開催した。大会会場の生涯学習センターのあるウイング・ウイング高岡は、高岡駅に隣接する交通便のよいところであった。

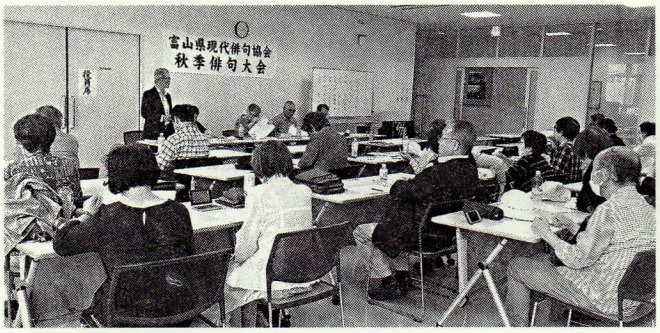
今回の吟行地の高岡は、元々加賀藩の領地であり、古城公園(中に動物園がある)を中心に大仏や風情のある古い街並みなど、句材の多い吟行地である。会員はそのような中で思い思いの句を作り、俳句大会に臨んだ。

参加者三十八名、一人二句の投句で、合計七十六句。午後一時、高木会長の開会の挨拶で大会を始めた。一人五句選。点数を集計する間に、森野顧問、高木会長、高橋副会長、櫻打副会長の四氏によるパネルディスカッションを行った。それぞれ選んだ句及び注目する句について選評を行った。フロアとのやりとりもあり、活発で有意義な議論が行われた。

大会は高点句者の表彰に移り、終了となった。

主催＝富山県現代俳句協会
期日＝令和六年九月二十九日　日曜日
場所＝ウイング・ウイング高岡
吟行地＝高岡古城公園、山町筋、大仏等
参加者＝三十八名
一人二句投句＝計七十六句
一人五句選＝入賞・入選　計二十一句

会長挨拶



パネルデスカッション

【入賞】

天位　大仏の視界は無限鳥渡る　吉田　久夫
地位　格子戸は日向の匂い秋日傘　櫻打　伸子
人位　大仏の真向かひに座し秋思断つ　布本美知子

【入選】

爽籟や土蔵の町の軒深し　吉田　憲子
家持の像に秋風電車着く　坂田　直彦
小鳥来る異人の白きスニーカー　高橋　修宏
小鳥来る古城の森の丸太椅子　河岸　佳子
石垣の朽ちてなす色こぼれ萩　盛本紀久子
そぞろ寒異人と仏の胎の中　垣内　和代
さまのこや色なき風の編む小路　高島　詩香
路地抜けて風の行方や秋風鈴　河合　彰
ペンギンの嘴一斉に素風向く　森川　敬三
大仏の螺髪に余る秋思かな　吉田　憲子
大仏の台の地獄絵抜け秋思　森川　敬三
河骨へ鯉の水輪の二波三波　青木　恭子
駆けつこのドラえもん像秋闌くる　高木　昭夫
仕舞屋の暖簾の解れ秋深む　髙田　実
秋の風大仏囲む異国人　中川　泰信
大仏の胎内めぐる秋の蠅　高橋　修宏
草の実やエミューの恐竜めける指　高木　昭夫
昼ちちろ美男大佛耳澄ます　二口わこう

富山県現代俳句協会
発行人　高木　昭夫
編集人　高橋　修宏
事務局　吉田　久夫
〒九三三-〇一〇二　小矢部市水島七六
TEL　〇七六六-六一-二七七七

令和六年度 富山県現代俳句協会
秋季吟行俳句大会
［入賞作者の思い］

天位　大仏の視界は無限鳥渡る　吉田　久夫

大仏と対峙し、しばらくそのやさしい目差の中にいると、「無限」という言葉が降りてきた。大仏がすべてを見通しており、万物がその視野の中にあるという思いからである。パネルディスカッションで高橋副会長が指摘されように、理屈として受け取られるかもしれない。ただ、大仏の目を借りて高所から見渡している臨場感を感じ取ってもらえれば、吟行句として味わっていただけるのではないかと思う。

季語に迷ったが、大仏の静に対して動を当てたいと思った。古城公園の上空で目にした鶴と鴨からの発想で「鳥渡る」とした次第である。

これからも、季節の移ろいを感じながら、自分らしい俳句作りに取り組んでいきたい。

地位　格子戸は日向の匂い秋日傘　櫻打　伸子

高岡市の金屋町は、千枚格子戸と石畳がレトロな雰囲気を醸し出している。格子戸は外観の美しさだけでなく、通気性と採光にも優れ機能的である。石畳を踏みながら格子戸に近付くと日向の匂いがした。長年陽に当たり、その温かで郷愁を誘う独特な匂いを漂わせるようになったのだろう。

その匂いを忘れまいと、「格子戸は日向の匂い」とメモをした。投句をする際、下句に「秋日和」「秋深し」「秋日傘」と書いてみた。以前日傘で石畳を歩いたことを思い出し、一枚の絵になるようにはっきり見える「秋日傘」を選んだ。

人位　大仏の真向かひに座し秋思断つ　布本美知子

久し振りの吟行会に参加させてもらいました。吟行地は高岡。やはり一番の魅力は高岡大仏。その座像を見上げますと、柔和なお顔立ちの中には品があり、面差しは優しさに満ちており、ざわついた心を包みこんでくださるような気が致しました。真向かいのベンチに腰掛けながら、句友の方を仰ぎ見ておりますと私の心が静かにほどけていくようでした。心の揺らぎを秋思として詠んでみました。

佳句再見

高橋　修宏

囀りも爆発も聴けば聞こえる　高島　詩香

春季俳句大会で注目した一句。もちろん「囀り」とは、春の季語。ウグイスやホオジロなどが、ときに、かしましく鳴き交す様子をあらわし、いかにも春らしい気配に満ちた言葉である。しかし掲句では、そんな「囀り」と「爆発」とを並列に置く。ここでは「爆発」と記されるだけであるが、その先に戦争や事故などの悲惨なイメージも含意させているはずである。さらに、「聴けば聞こえる」と書くことで、われわれの聞くという行為をめぐる恣意性さえ痛烈にあぶり出してゆく。聴こうとしなければ、何も聞こえないのではないか…、と。並列を活用したシンプルな構成でありながら、鋭利な批評性をひそませたアクチュアルな佳句である。

猫じゃらし万葉線のドラエモン　古澤　桃

秋季吟行大会で出会ったポップでありながら、懐かしい味わいの一句。「猫じゃらし」、「万葉線」、そして「ドラエモン」――。そんな名詞だけの構成でありながら、高岡という土地をめぐるイメージの中の光景が、あざやかに立ち上がる。やはり一読、「ドラ

エモン」の措辞に目がいくが、そのキャラクターの原形がネコであったことに気づくと、上五の「猫じゃらし」の季語は動かない。にわかに、ユーモラスな気配さえ帯びてくる。一方、「万葉線」という歴史性を感じさせる名称も「ドラエモン」のレトロな雰囲気と響き合う。漫画やアニメのキャラクターを句材とした、奥行きのある佳句ではなかろうか。

事務局だより

Ⅰ　第4回役員会

一　日時　令和七年二月十一日(火・祝)十三時～
二　場所　富山県教育文化会館五〇三号室
三　議題　二〇二五年定期総会・春季俳句大会等

Ⅱ　令和七年定期総会・春季俳句大会

一　日時　令和七年三月二十三日(日)十三時～
二　場所　富山県教育文化会館集会室

多くの会員の皆様のご参加をお願いいたします。

Ⅲ　第三十二回北陸現代俳句大会

一　日時　令和七年五月十七日(土)十二時三十分～
二　場所　石川県女性センター
三　投句締切　令和七年二月二十八日(金)
講演及び特別選者　秋尾敏先生(現俳協副会長)

ご投句及びご参加をよろしくお願いいたします。

現代俳句鑑賞（Ⅰ）

高橋　修宏

夏夕焼授乳の母を円心に　宇多喜代子

「三月十一日以降　原発を円心として」という詞書の記された三十句の中の作品。

句集名ともなった「円心」とは、大辞林によれば「円の中心」という意味のほかに、仏教用語で「完全な涅槃を求める心」という意味をもつとされる。

ひとつの連作と呼べる作品の中で、直截に原発自体を指し示す言葉は、ほとんど使われていない。それにも関らず、いや、それゆえに「詞書」と照応するように一句一句に彫琢された言葉の深淵に立ち止まらずにはいられないのだ。

掲出の作品は、何も声高に詠まれていない。しかし、平明な比喩に見える手法の中に、沈潜した批評性が込められた、祈りにも似た一句である。そこには、「完全な涅槃を求める心」も同時に読み取るべきなのかもしれない。

さらに連作の悼尾に置かれた、「秋はじめ円の内外に同じ風」。私たち自身の知覚では、けっして「風」の違いが感知できないがゆえに、ただ底無しの不安だけが静かに喚起される一句である。

出典：『宇多喜代子俳句集成』(角川書店)

野菊まで行くに四五人斃（たぶ）れけり　河原枇杷男

俳句初学において、殊に引かれた俳人の一人が河原枇杷男だ。その作品に通底する思惟の抽象性や超現実的な表現、さらに自己存在を問う文学的な主題性は、それまで現代詩(戦後詩)に親しんだ者にとって魅力的な俳句世界であった。

「身の中のまっ暗がりの螢狩」、「枯野くるひとりは嗄れし死者の声」、「或る闇は蟲の形をして哭けり」など、いくつもの作品を愛誦しながらも、やがて自己存在をめぐる、どこか固定的な身振りに魅力を失せてしまい、枇杷男の世界から遠のいてしまっていた。

しかし、いつまでも読み解きえないまま留まりつづけていたのが、掲出の一句だ。何故、「野菊」なのか。何故、「四五人」斃れたのか。何も明かされぬまま、永遠の謎のように投げ出されている。作者が自作ノートに、「邂逅とは、ともに来し方不明であると同時に行く方不明になりつつある関係であろう。」と記した言葉と、どこか昭応しあうかのように。

そして3・11の大震災後、この一句について松下カロは「野菊は切望であり、思想であり、原子炉である。」と、鮮やかな断言を記す。斃れた「四五人」が現前するような、何とクリティカルな読みではないか。新たな読み手によって一句が、見事な窯変を遂げる。このような恩寵もまた、俳句という詩型に孕まれた不思議と呼べるものではないだろうか。

出典：河原枇杷男句集『鳥宇論』(俳句評論社)

結社・句会だより

「海原」

◇海原富山支部　休会中

「寒潮」

◇現代俳句誌「寒潮」三三三号～三三五号発行

◇寒潮　結社内の「大沢野俳句会」の七名が当地にある「ゆ～とりあ越中」のロビーにおいて、十月の一ヶ月間、作品展示会を開催しました。

短日や涙脆さを夫は言う　二口わこう

林檎剥く顔傾けて口曲げて　小田　舞

「喜見城」

◇俳誌「喜見城」八九二号～八九四号発行

◇令和六年度同人会を開催。日時：六月十六日（日）

場所：新川文化ホール　参加者十四名

同会での県協会員の入選句は次のとおり

二位　万緑に吸ひ込まれゆく郵便車　石田　英子

夏つばめ飛び交ふ路地の空となり　漁　俊久

三位　御朱印の墨の香清し若葉風　布本美知子

水無月の雨の匂ひやパン焼ける　河岸　佳子

放たれて自由を得たり稚魚の鮎　大久保置箔

「峡谷」

◇峡谷二十一周年記念俳句大会

日時：六月十四日（金）　場所：宇奈月公民館

天位　五月来る吾に俳句てふ杖一本　中　静子

地位　のどかなる待合室のいびきかな　大田　保文

人位　子ら遊ぶ声は花野の風となる　堀　智恵子

「玄鳥」

◇俳句誌「玄鳥」十二月号で通巻三六〇号を発行

◇結社玄鳥は創刊より三十年の活動を本年十二月で終えることとなった。

◇玄鳥誌記念号発行

◇「玄鳥」推薦句

笹舟を手波で送る星まつり　跡治　順子

喇叭吹く少年兵の終戦日　高島　詩香

夜半の秋窓の向こうにいる私　河合　彰

「高志」

◇俳誌「高志」五三〇号～五三四号発行

◇「高志」文化祭俳句大会

日時：令和六年十一月四日（月・振）　場所：氷見市芸術文化館　参加者二十八名　不在出句十一名

運転実技のS字脱輪老いの秋　田畑晴津子

寝れぬ夜の手の置き所秋深し　正橋美枝子

木の実落つ耳打ちし合う羅漢像　尾山勢都子

家売らん戸口離れぬちちろ虫　櫻打　伸子

転がして大樽洗う秋日和　細野　千里

「草樹」とやま草樹句会

◇会報　二一六号～二一九号発行

月一回の句会を継続

くづし字のひとつに惑ふ夜長かな　亀谷　正恵

渦巻に秘密あるらし蝸牛　兒堂　衣代

折鶴は飛び立つかたち秋さびし　飯干ゆかり

赤とんぼ群れて最後の同級会　吉田　久夫

人の鍵拾うてしまう秋暑かな　森川　敬三

◇九月富山県現代俳句協会秋季吟行俳句大会において吉田久夫が天位獲得。

大仏の視界は無限鳥渡る　吉田　久夫

「岳俳句会」北陸支部

◇毎月第一水曜日に俳句会又は吟行会を開催。十月下旬、十一月初旬に地域の文化祭に周知と募集をかねて出展、四季の俳句を展示。

◇第二水曜日に岳誌に投句のため検討会を実施。

「みのり俳句会」

◇会員数は十五名。毎月一回句会を開催。

◇十一月二十六日吟行句会実施。十月句会より

クルーズ船港へどっとエトランゼ　戸田　幸夫

朽ち舟に秋茄子育て廃漁港　細川　正雄

秋海棠妻は日没とともに消え　白井　重之

新米を握る母の手湯気香る　中川　泰信

「森」

◇月刊俳句誌「森」は十月号で通巻一六九号になり、創刊して十五年目に突入したことになる。

◇恒例の年次俳句大会は、十月十四・十五日に「新潟県柏崎市三名園巡り」として開催した。宿泊は市内上下浜温泉のホテル。ホテルから日本海の夕日を眺める絶好の場所だったが、あいにく交通事情で日没三分後に到着。すこしがっかりしたが、それも句材として詠む人が多かった。

釣瓶落しの余燼を探す波の上　森野　稔

「豈」

◇俳句空間「豈」第六七号発行

特集は、攝津幸彦の百句。高橋修宏は作品鑑賞を執筆。また、多行形式の作品二十句を発表。

能登島の／揺れて／蝦夷穴／魂つどい　高橋修宏

◇高橋の著作『鈴木六林男の百句』（ふらんす堂）を筑紫磐井氏が書評「敗戦前夜」している。